

最良の栄養素であるとし、これに Protein の名称を与えた。エルメレンスは和蘭において、これらの学説を習得して来朝し、一八七三年大阪病院での医学講義・薬物学(第二〇卷)において、彼はさらに無機質の重要性をも加えて、「蛋白質、脂質、糖質、無機塩類」の四大栄養素の重要性について講述した。さらに彼は開院に際し病院給食献立を指導し、毎日各等の昼食には魚を、夕食にはビーフステーキ・牛肉を献立した。当時日本一の経済都市である大阪の中心地、船場の商家での常食は「朝かゆや昼一菜に、夕茶漬(阪大宮本又次教授)」に比すると、現在から見ても栄養豊富な病院給食が献立された。

エルメレンスは医学教育において、四大栄養素につき日本で最初に講述した医師であり、実際栄養学として、栄養豊富な、病院直営の病院給食を日本で最初に実践した偉大な医養学者である。

その後一九〇〇年代に至り、ビタミン類が発見されて、現在は五大栄養素時代となった。この病院は、のち府立大阪医科大学、大阪帝国大学、大阪大学附属病院へと発展し現在に至っている。

(奈良佐保女学院短期大学)

浅井図南『扁倉伝割解』をめぐる

荒木ひろし

『扁倉伝割解』は尾張藩医学訓導、浅井政直(図南・一七〇六一—一七八二)が万感の抱負をこめて著わした『史記』扁鵲倉公列伝の註解書である。割解の語は扁鵲伝の中の「皮を割き、肌を解く」に由来する。解剖釈義して粗意を得たものという意味である。

浅井家は盛政(延齊)が医系を草創してより累代わが国に展開された伝統医学(漢方)の命脈を保持した。図南はその中興期に際して、祖父正純、父正仲らがひとたび根づかせた医方を更に浸透させ、明和・安永年間(十八世紀後半)以降の、その在り方を模索した先達の一人である。その活躍期は、吉益東洞が京都において万病一毒に約言される「古方」を唱え、『類聚方』に代表される方証相對、随証理劑の考え方を徹底化した独特の医学理論を實踐した頃とほぼ同時期にあたる。

この時期に一般的な傾向としては経書と並んで史書・諸子の書が見直されつつあった。凶南に先だって東洞が、その医学観を確立する契機としたのも、扁倉列伝、呂氏春秋、淮南子等の諸子の文献を読みこむことであった。ただし、東洞にとっては扁鵲Ⅱ疾医Ⅰ扁鵲内・外経Ⅱ傷寒論の枠組みが全てであり、倉公Ⅱ陰陽医、葛洪・孫思邈Ⅱ神仙医の二家の方は治療に益なしとして退けられた。

これに対して凶南は経史子を修めて扁鵲伝と倉公伝の兩者を詳細に割解した。凶南によると両列伝が重要であるのは、医方における病の応と病の因とを究めるのに恰好であるばかりでなく、その理が精奥であるからだといふ。因と応については後述する。理については倉公の診籍に対する割解を読むと瞭然である。凶南はこの列伝に、いわば内経医学を検証するものとしての意義を見出したといつてよい。

『割解』は明和六年（一七六九）嗣子正路（南溟）の補考が加えられて刊行された。しかし凶南自序によると稿本はこれより三年前にできていた。明和三年というと、東洞の言説をまとめた『医断』が刊行されてより七年後、畑黄山

『斥医断』より四年後、堀江道元『辨医断』と同年、山田成珍『天命辨』に先だつこと五年である。このようにみると『割解』の稿が成つてから刊行されるまでを含めた前後の時期は、いわゆる医断論争のただ中である。この論争では『医断』を難じた者の多くが、司命、天命——死生命あり——といった語句にのみ拘泥して、東洞が本来喚起した筈の伝統医学批判に対する応答といったところまで論及はず、不毛の論争に終始した。まして当面問題の書であった扁倉列伝に踏みこんで、内経医学を検証するといった具体的な指針を示すところまでは及びもつかなかったといつてよい。

『割解』に関する限り、この論争に対しては一言半句の言及もなく、扁鵲伝に見える司命の語にも何ら特別な註解は加えられていない。そこにあるのは、従来、史伝とも医学ともつかぬものとして等閑視されてきた扁倉列伝の内実を求める割解記述だけである。しかし本文に加えられた詳細な註解と、自序とを併せて考慮すれば、凶南が『割解』に托した真意は明確な姿をあらわすのである。

この伝や、士の医方に精しくして百家に渉る者にあらざ

れば通ずる能わず。顧に当今の世に医方に精しくして百家に渉る者、我をおきて其れ誰ぞや。我もし唱えざれば孰かよくこれに和せん（自序）

自己の学識に対する確かな自信を吐露して時流に動ずる気配はない。しかも右に続けた自序に、この列伝に取り組んだ自己の役割りを秦に抗した陳勝・呉広に類比させ、秦に替わって新たな統一体を作った項羽や劉邦にも匹敵する優れた註解者の出現をまつという。自序は「願わくは劉項の業成るの日、陳呉が憔悴を啜るなかれ」と結ばれている。

この陳呉劉項の四字は、その前に隠れた前提としてある秦を補って読むと寓意に満ちている。

小稿の最後に扁鵲伝・魏太子病案をのべる。

①中庶子曰……上古之時、医有俞跗、治病不以湯液醴灑

（酒）、鑿石橋引、案杭毒熨、一撥見病之応因五藏之輪、

割皮解肌……

②扁鵲仰天歎曰……越人之為方也、不待切脈、望色、聽聲、写形、言病之所在、聞病之陽、論得其陰、聞病之陰、論待其陽、疾応見於大表、不出千里、決者至衆……

右に。点を附した(②)のは東洞が病の応——病毒が体表

にあらわれると取意した部分、ゴシック体は割解細註がつけられた部分である。東洞が因を問わずに応を捉えようとしたのに対して、凶南は応を感じ、因を根因と読み、医する者は必ず其の応を察して因を知り、其の因を取りて治に応ずべきだという。凶南にとって、医方の究明は千言万語を以てしても因と応とを究めるところに主眼目がおかれたのである。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室）